倉吉東高校新聞
第43号
4月10日発行
倉吉東高新聞部

ボランティアは心のコミュニケーション

陸前高田市(岩手)でボランティア活動

先月17・18日の二日間、東高新聞部は東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市を訪れ、ボランティアに参加するとともに、現地の復興状況を取材した。

ボランティアセンターがない

JR一関駅で下車し、レンタカーでボランティアセンターがある陸前高田市社会福祉協議会に向かう。カーナビが示した場所に到着すると、そこには建物はなく一面がガレキの山だった。社会福祉協議会のビルも津波にのまれ、多くの職員の方々が被災されたという。いきなり震災の現実に直面し言葉を失った。

センター職員の佐藤聖実さんにお話を聞く

手作りでシステムを構築

その後、移転したボランティアセンターに到着し、センターの職員で、自宅も津波の被害にあわれた佐藤聖実さんに話を伺った。佐藤さんの担当は「ニーズ・マッチング」で、ボランティアの依頼者と希望者をつなぐ仕事をされている。当初は地元の方も職員の方々も「ボランティア」という言葉になじみが薄く、何を依頼し、どのように支援すればよいのかよく分からなかった。しかし口コミで少しずつ情報が広がり、職員も手作りでシステムを作っていった。

主なボランティア内容は、ガレキの撤去、側溝の泥あげ、入浴介助、海苔養殖に使うイカダ作りなどである。現在はピーク時の六分の一程度の参加者で、多い日では200名前後になっている。しかしリピーターも依然として多く、まだまだ震災被害に対する人々の関心の高さが伺われた。

想像を超える津波の被害

「気持ち」が復興の支えに

ボランティア参加者の多くは、滞在時間が限られているため、作業効率を求めがちである。しかし、ガレキは被災者の方々にとっては大切な思い出の一部でもある。むやみに放り投げたり、粗略に扱ってはいけない。「作業の進行も大切ですが、復興のために協力したいというボランティアの方の気持ちが、復興への大きな支えになるんです。被災者の中には、ボランティアの方とのコミュニケーションを通じて、心の傷を少しずつ癒している人もいます。陸前高田に多くの方が訪れてくださることは、本当にありがたいです」と話された。その一方で、ガレキをバックにピースサインをして記念写真を撮ったり、ガレキの一部をお土産として持ち帰る参加者もあり、地元の方は心を痛めている。この取材を通じて、ボランティアには心のつながりが必要なことを改めて感じた。（野﨑うみ）

いざ、瓦礫（ガレキ）の撤去へ

鉄板入りの長靴を着用

18日（日）8時半、寒空の下での朝のミーティングからボランティア活動は始まった。この日のボランティア活動者数は222名。ボランティアをする際は、目を保護するためのゴーグルにマスク、釘を踏み抜かないように鉄板のインソールが入った長靴を着用することが求められた。釘を踏んで足を怪我するなど、私たちの普段の生活からは想像できない。服装・装備を整えながら、震災被害の大きさを想像し、心が震えた。

ガレキは「タカラモノ」

私たちは畑作りを担当した。依頼内容は「津波によって家が流されてしまい、跡地に家を再建することが禁止されてしまった。石やガレキが混ざってしまった自宅跡地を素敵な畑にし、畑作りを楽しみたい。そのために石を取り除いてほしい」というものだ。

土の中からガレキを取り除く

現地の被害状況は想像以上だった。本当にここに人が生活していたのかと思ってしまうほど、家がすっかり流されていた。そして緊張しながら撤去作業へ。作業をしていく中でまず感じたことは、予想以上に撤去作業は時間が掛かるということだ。依頼内容は「宅地の半分を畑に」とのことだったが、ガレキの量がとても多く、完成までには、相当な時間と労力が必要だと感じた。

ボタンとタイル

作業をしているうちに、お風呂の色鮮やかなタイル、洋服のボタンなどがガレキの中から出てきた。そのときにふと、朝のミーティングで聞いたセンター長・星拓史さんの言葉を思い出した。それは、「ガレキ＝ゴミ」ではなく被災者の方にとっては大切な「ガレキ＝タカラモノ」が含まれているということ。震災の一秒前まで人々が幸せに暮らし、さまざまな思いをはせ、生きてきた証なのだ。ガレキの本当に意味に気付かされた私は、ますますスコップを握る手に力が入り、掘り出されるものを大切に扱うように心掛けた。

作業を通じて生まれた絆

ボランティアとは「人と人とのつながり」だと感じたのもこの体験を通してである。正直ボランティアをする前は「きっと暗い気持ちで作業をするのだろう」と思っていた。しかし、作業をしていくうちに他のボランティア参加者とも打ち解け、この作業を通して絆が生まれた。「被災者のために何か自分にできることはないのか…」そんな思いの人たちが、一緒に作業をし、同じ空気を吸い、言葉を交わす。その時に絆が生まれるのだ。そして被災地で得たものが自分の生き方に大きな影響を与え、その影響や思いを周りにも広げていく。これが最も重要なことではないだろうか。もとの場所に帰ったら震災ボランティアの仲間はいない。

しかし、ひとりが動き出したら周りも動き出す―。そんな日本人の絆とエネルギーの連鎖を信じ、人々の思いが大きなうねりとなっていくことを祈っている。

（吉川　友沙）

ボランティアセンターにて